

焼津における鰹漁業の資本形成過程と漁撈組織

——大戦前における或る経営事例についての考察——

大 崎 晃

目 次

- 一 本稿の課題
- 二 漁船建造資金の調達
- 三 漁撈組織としての船中
- 四 総 括

一 本稿の課題

本邦の漁業における資本形成の初期においては、系譜上小企業層からの自成がしばしば見受けられる。そこで問題は、資本形成の初期においてこれらの小企業層がどのような資金的条件のもとで生成し、経営を展開させていったかということである。この点、静岡県焼津の鰹漁業については、漁船建造資金を乗組員の集団である「船中」と呼ばれる組織と折半出資した二つの地場資本の船主法人、東海遠洋漁業株式会社と焼津町生産組合の存在が知られている。⁽¹⁾両法人は、前者が地主・金融資本による投資活動を、後者が加工・商業資本による原料集荷をそれぞれ創設時の目的にしていたが、償却金の計算法、資本形成

に果たした役割、船中との関係等両者は同一の範疇におかれていたとみなしてよいだろう。

筆者は前稿で、焼津町生産組合の事業記録を通じて、この時期における同組合がこの地の鰹漁業の資本形成に対して果たした上からの役割について若干の考察を試み、資本蓄積の前提である生産性の向上に不可欠な生産手段の大型化効率化、すなわち動力付大型船の建造に要する資金の半額を、船主法人が担っていたことについて検証した。しかし同時に次の点を課題として残した。両法人は、漁船を名義上は所有するものの実質上は船中との共同所有であり、操業は船中が行うため単なる設備貸資本に止まっていた。これは法人の資金不足、あるいは不漁・海難等不安定な漁業に対する分散少額投資による危険回避策の選択だったこともあるだろう。しかし一方このことは、船中にとっては動力付大型船所有の希望が共同所有ではあっても一応は満たされることになって、単なる賃労働者化への後退をまぬがれたことを意味し、やがて将来小企業層生成の下からの途も開かれていたことを示している。そしてさらに注目すべきことは、鰹一本釣漁業の生産性の向上は、

技術的に資本（＝機械）力だけでは達成されるとはいきれない面をもっていることである。一般の工場制機械労働に比べて漁撈活動では、個人の熟練技術や協労組織が生産効率に関係してくる。ここに資本が船中に対して共同所有方式を採択し、操業を委任した他の事情が存する。かかる事情は、同時に資本による乗組員の包摂如何が投資効果を規定していたことを示している。そしてこのことが、一方では小企業層拡大の桎梏となり、他方では外部資本参入の障壁となつて、鯉漁業では以西底引漁業や北洋漁業にみられたような高次の資本形成にむけて展開することがなかったのではなからうか。

本稿は前稿に続いて、焼津で永年にわたつて鯉漁船上三船、明治四一年からは改名して東洋丸を経営してきた船元北原家の経営と同船中の組織を一つの具体例として呈示し、設備（＝漁船）資金の調達方法と乗組員労働力の確保についての若干の考察を試みる。

注

(1) 岡本清造「焼津鯉漁業に於ける船仲組織（上）（下）」経済論叢 第三四卷 昭和七年 七三七～七四三頁 七九七～八二四頁。

岡本清造「焼津鯉漁業経営形態の推移（一）（二）（三）」水産界 六〇六～六二〇号 昭和八～九年 頁数略。

東海遠洋漁業株式会社「同社三十年史」昭和十二年。

焼津漁業協同組合「焼津漁業史」昭和三十九年。

大海原宏「焼津における地場資本の形成とカツオ漁業の資金調達について——明治・大正期の漁業経営を中心に——」東京水産大学論集 第

四号 昭和四四年 二三～四〇頁。

(2) 拙稿「静岡県焼津における産業資本形成期の水産金融」国士館大学文学部人文学会紀要 第一四号 昭和五七年 一〇九～一二六頁。

二 漁船建造資金の調達

焼津における藩政時代の鯉漁船は、運上によって領主から操業権を保証されたものであった。

魚獵運上御請証文之事⁽¹⁾

一金貳拾七両貳分 壹ヶ年季三ヶ村

但船数

壹艘ニ付

右ハ三ヶ村魚獵運上書面之金高ニ而当壹ヶ年御請被仰付候ニ付私共右之趣被仰渡承知仕候（中略）万一右船数之内ニ而上納金滞之筋茂有之候共惣船ニ而御請申上候上ハ其分惣船ニ而急度弁納仕御役人中え少し茂御苦勞掛ケ申間敷候為其御請証文仍而如件

安永七年戊四月

城之腰村漁師	連	名
北新田村漁師	連	名
鰯ヶ島村漁師	連	名

城之腰村北新田村鰯ヶ島村

御役人中様

この史料では、総船数と一隻の運上額は欠落していて不明であるが、他の史料とその後の経過からみて一隻一両ずつ合計二七隻二七両を、三カ村の共同負担で漁業者代表が請負上納していたとみられる。このことは鯉漁業の労働組織の単位である船中が領主による運上賦課機構の組織ともなり、また運上金上納を通じて二七隻の鯉漁業の排他独占的権利が公許制度化されたことを意味するものでもあった。そして一隻一両の船役運上の直接上納者で船中代表者でもある「船元」の地位を、しだいに船中内で船主の地位におし上げるとともに、船数定数制も船元の地位補強に作用したと考えられるが、この時代の船主の権限を知りうる史料は存在せず詳かにしえない。

約定書⁽²⁾

今般焼津村鰯ヶ島城之腰北新田鯉漁船主総代人ト全鯉漁船々頭総代人ト双互協議之上鯉漁期中捕獲高配分方左ノ通約定候事

一、捕獲高千分ノ三拾

会社口銭手数料

一、全 千分ノ貳

焼津神社献金

一、全 千分ノ壹半

積立金

右三項ヲ控除シ残額ヲ左ノ如ク配分ス

一、全 千分ノ九十貳

船主船代料

一、全 千分ノ壹百

餌網料

一、全 残余

船子ニ配分ス

(後略)

明治三十年八月十五日

志太郡焼津村鯉漁船主総代

連 名

右 全 船頭総代人

連 名

この記録は、時代が下って明治三〇年のものであるが、船主は船価償却分の船代料と鯉漁業の餌鰯を自給した当時においては、餌網料の合計二割ばかりを取得し、残余の八割余が乗組員である船子に分配されている。ここから船主負担額と船子労働報酬を歩合で分配する当時の慣行を知ることができる。

さて、明治三四年、上三船船中では新船を建造するがその資金は従来船元北原家が負担していたが、この時は北原家と船中乗組員の船方とで折半されている。

当松魚船ハ上三船ト云フ 右松魚船ハ以前上三家ノ所持ノ処都合

ニヨリ明治三十四年新造船ヨリ船方ト二ツ割之中間持トス

一、当船之損害又ハ入益モ二ツ割ヲ以テ分割スル事

一、右松魚船新調入費左之通り

金三百二十二円九十四銭九厘

新造船入費

金二百六十円

古道具費

合計 金五百八十二円九十四銭九厘

内訳金二百九十一円四十七錢四厘五毛
全 金二百九十一円四十七錢四厘五毛 北原吉太郎 船方中

明治三十四年四月一日約定ス 船方ハ左ノ口数ヲ分持ス

貳口	全	北原 徳右衛門
貳口	全	北原 徳藏
貳口	全	秋山 仙藏
貳口	全	北原 熊吉
貳口	全	鈴木 藤吉
貳口	全	鈴木 重五郎
貳口	全	秋山 仁右衛門
貳口	全	天野 亀吉
貳口	全	北原 新吉
貳口	全	増田 新吉
貳口	全	鈴木 九平
貳口	全	北原 次郎兵衛
貳口	全	北原 丑之助
貳口	全	北原 銀藏
貳口	全	北原 寅吉
貳口	全	加藤 長太郎
貳口	全	北原 吉藏
貳口	全	鈴木 熊吉
貳口	全	秋山 松吉
貳口	全	
金七円二十八錢七厘		

壱口	全	鈴木 千右衛門
壱口	全	北原 源藏
壱口	全	原田 仙吉
壱口	全	中野 音吉
壱口	全	北原 音吉
壱口	全	北原 梅右衛門
壱口	全	片山 幸松
壱口	全	北原 万吉
合計口数四十口トス		松魚船惣収益ハ半分ハ北原吉太郎半分ハ右
口数ヲ以テ分配スル者トス		

新造船が船元北原家と船中船方の共同出資になった事情は、この記録では「都合ニヨリ」とあるだけなので不明だが、おそらく五八二円に膨張した造船費を船元だけで負担することが困難になったためであらう。新造船の所有権は、上三家（北原家）と同家の分家・別家を中心とする船中出資者二七名の共同所有となった。このように、かつて船元が負担した造船費の半分を船中船方が代って引受けるようになったことで、以後船方は経営から生ずる損益を船元とともに負担および享受することになった。

明治三十九年、静岡県が建造した石油発動機付試験船富士丸の試験操業に触発されて焼津でも動力船建造の気運が起った。明治四〇年の東海遠洋漁業株式会社と、翌四一年の焼津町生産組合の二つの船主法人

が起業し、それぞれ船中との間に動力船を共同出資で建造し、焼津の動力船時代が開始された。⁽⁴⁾ 北原家と上三船船中では、東海遠洋漁業株式会社と折半出資による動力船東洋丸の建造に着手した。

明治四十一年改良船入費調⁽⁵⁾

一金二百九十円也	古道具一切	計金五百九十六円六十五銭八厘	内出シ分
一金千七百円也	機械代金	内十円五銭四厘	古道具売代金
一金千五百九十円七十五銭六厘	舟代金	内三円也	戻り金
一金二百円也	機械替損害	差引ノ金五百八十三円六十銭四厘	舳舟当リ
一金三百円也	機械増金	内三百四十九円三十銭二厘	舳舟造作費
一金五十七銭五厘	造舟増金	内二百三十四円三十銭二厘	八百五月掛
ノ金四千八十一円三十三銭一厘	仕入	内四十一円四十銭	舟方中取金
一金千十円五十六銭二厘	入費	一金二百三十四円三十銭二厘	舟元取金
二口ノ五千九十一円六十四銭三厘(ママ)	大舟当リ	内百七十五円也	舟方中間預
内千二百二十九銭	大舟割	一金三百四十九円三十銭	舟元分
内二千八百八十七円十五銭三厘	不足	内百七十五円也	丸東会社エ積立
差引ノ金千八百八十一円八十銭	会社割前	一金百六十二円五十五銭四十口割四円六銭ツツ	舟方中
二ツ割五百九十円九十銭	舟元割前	貳口	丸東会社エ積立
全 五百九十円九十銭	古舟売代金	貳口	鈴木 重五郎
造舟費之内入金部	舟方出シ分	老口	北原 徳右衛門
一金二百六十円也		参口	鈴木 熊吉
一金三百七十円也		老口	北原 徳蔵
			秋山 松吉

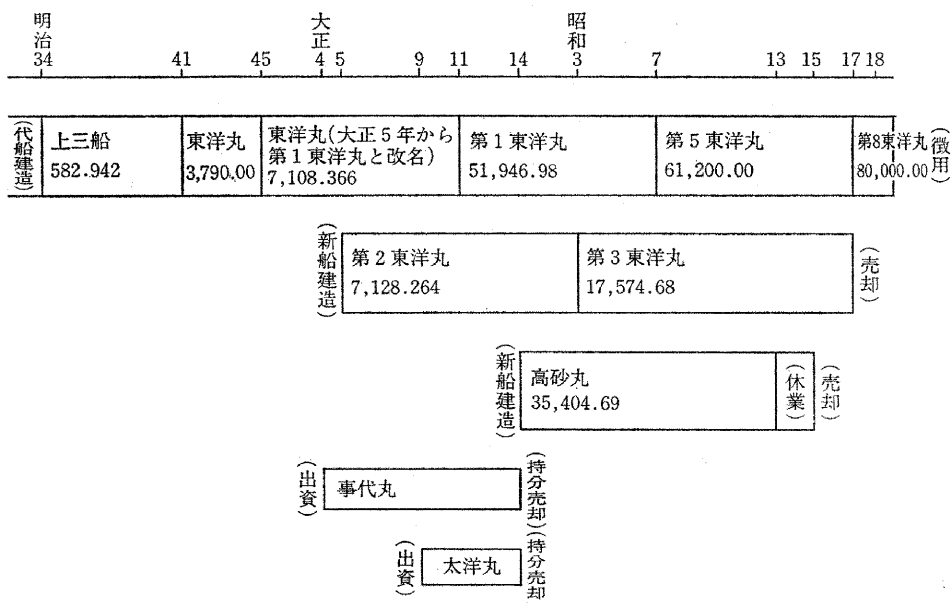
造船費四、〇八一円は、東海遠洋漁業株式会社と上三船改め東洋丸船中とで折半し、船中負担分はさらに船元北原家四割と船方六割の割合で負担した。造船費は、初年度の収益と古船の処分金で大半を充足できたため、直接の払込金は一、一八一円、内船中負担分はその半分の五九〇円であった。この船中負担分は、船元北原家とその分家・別家二五名を中心とする船中が出資したが、旧船体の売却費も充てたため余剰金を積立てるまでになっている。

ついで明治四五年の代船建造の場合（第一図）をみよう。

明治四十五年新造船持分⁽⁶⁾

金七千八百三十六銭六厘	惣金高
内三千五百五十四円十八銭	船元持
内三千五百五十四円十八銭	会社持
又二ツ割千七百七十七円九銭	舟元分
全 千七百七十七円九銭	舟方分
右金五十五口ニテ持分ス 沓口ニ付三十二円三十一銭	
沓口	鈴木 平次郎
沓口	鈴木 熊吉
参口	北原 徳藏
沓口	北原 倉吉
沓口	北原 徳右衛門
沓口	秋山 仙藏

沓口	北原 倉吉
沓口	秋山 仙藏
沓口	加藤 長太郎
沓口	北原 寅吉
沓口	北原 梅吉
沓口	北原 鉄吉
参口	北原 丑之助
沓口	村松 万吉
沓口	北原 次郎兵衛
沓口	北原 音吉
沓口	北原 熊吉
沓口	鈴木 仙太郎
沓口	北原 新吉
沓口	北原 源藏
沓口	北原 市藏
沓口	鈴木 藤吉
沓口	鈴木 九平
沓口	原田 仙吉
参口	天野 亀吉
沓口	内
沓口	片山市平



第1図 東洋丸船中関係船の推移 (数字は造船価格, 単位円)

壱口 新持人名 出金ナシ
 参口
 壱口
 壱口
 壱口
 貳口
 壱口
 貳口
 貳口
 貳口
 貳口
 壱口
 壱口
 壱口
 壱口
 貳口
 壱口
 貳口
 壱口
 壱口

一〇五
 出金
 北原 徳右衛門
 北原 吉太郎
 片山 市平
 村松 万吉
 天野 松吉
 天野 亀吉
 原田 仙吉
 北原 丑之助
 鈴木 九平
 北原 新吉
 北原 熊吉
 北原 源蔵
 北原 清三
 鈴木 福太郎
 北原 音吉
 北原 次郎兵衛
 北原 鉄吉
 鈴木 藤吉
 北原 寅吉
 北原 梅吉
 加藤 長太郎

沓口	出金	秋山 伊之助
沓口	出金	秋山 仙藏
沓口	出金	秋山 松吉
沓口	出金	北原 銀藏
沓口	出金	増田 音吉
沓口	出金	鈴木 九平
沓口	出金	山崎 利吉
沓口	出金	天野 亀吉
沓口	出金	長谷川 音吉
沓口	出金	山下 静一
沓口	出金	鈴木 弥七
沓口	出金	北原 友吉
沓口	出金	亀沢 勇次
沓口	出金	北原 吉太郎
一金百円也	水産会社四株分 ハンケ舟分	
右金五十五口ニテ割	一円八十一銭八厘	
惣メ金三十四円十二銭八厘	一口分	
一金三百四十一円二十八銭		
右金ハ新株十人ニテ借分		
右金ハ勘定之時丸東会社ニテ借分		

今回は、七、一〇八円に膨張した造船費の半額三、五五四円を東海遠洋漁業株式会社が、残りの同額をさらに半額一、七七七円ずつ船中の船元と船方が負担している。これらは毎年の償却積立金や旧船体売却処分金でまかなわれたと思われる（第一・二表）が、船方出資者も前回の二五名から三六名に増加した。当初出資を引受けながら払込ができないものが一五名あり、後に五名は払込をすませたが、残り一〇名は東海遠洋漁業株式会社の立替払となっている。まだ当時は、船元も船方も資金力に乏しかったことがわかる。

ところで焼津の漁業で設備（＝漁船）償却計算は、水揚げから市場口銭・組合費・漁夫冲乗奨励金を控除した残余から、夏漁の場合は一割五分、春・秋漁は一割二分、冬漁は一割を「船徳」と称して差引き、これを船体・機械の修繕および償却積立金に充てる。船徳から修繕費・償却積立金を控除してもなお残余のある場合は、これを出資間で分配しこれを「純船徳」という。東洋丸船中の資本形成も、資産（＝漁船）・資金の保有状況によって示されるが、これを同船中の船徳会計（第一～六表）からみていくことにする。

明治四五（大正一）年の東洋丸建造以来、同船中の主力船は一〇カ年償却で代船建造をくり返していく（第一図、第一～二表）。一方同船中は、大正五年にもう一隻の鯉船第二東洋丸を東海遠洋漁業株式会社と折半出資で建造し、やはり一〇カ年で償却していく（第一図、第三～四表）。この時の第二東洋丸の造船価七、一二八円の船中負担分三、五六四円は、第一東洋丸（同船中は二隻の鯉船を所有することに

第1表 第1・5・8 東洋丸船中持分船徳勘定 (借方の部)

年度	費目	会社立替分 への返済	船中船方へ の支払	本 船 持 分 負 担	他船持分へ の振替払	利 子 払	合 計
明治43			894.313				894.313
44			544.314				544.313
大正 1			1,160.973	(東洋丸) 3,554.18			4,715.153
2			1,081.647				1,081.647
3			1,503.451				1,503.451
4							
5	35.84		179.726		(2 東洋丸) 3,647.292		3,862.858
6	24.86		670.768				695.628
7			1,645.26				1,645.26
8			1,783.76				1,783.76
9			1,000.395				1,000.395
10	160.00		1,000.00				1,160.00
11	2,650.00		4,373.69	(東洋丸) 25,973.49			32,997.18
12			5,000.00				5,000.00
13			1,479.29		(高砂丸) (事代丸)		1,479.29
14			8,996.44		2,762.92		11,759.36
昭和 1			3,869.81				3,869.81
2	57.76		3,754.25				3,812.01
3			5,638.23		(3 東洋丸) 3,880.695		9,518.925
4	150.33		2,724.00				2,874.33
5	117.19		3,510.00				3,627.19
6			1,488.69	(5 東洋丸) 30,600.00			1,488.69
7			2,147.69				32,747.69
8	210.17		2,781.10				2,991.27
9	111.07		1,380.00				1,491.07
10	199.75		1,236.00				1,435.75
11	29.88		3,285.00				3,314.88
12	45.59		1,887.00				1,932.59
13	63.08		3,013.00				3,076.08
14	24.39		4,671.00				4,695.39
15	58.20		2,095.87	(8 東洋丸) 16,217.935			2,154.07
16	16.68		2,740.50				18,975.115
17	2,415.69		4,833.00	40,000.00 (8 東洋丸)			47,248.69
18	1,111.50		5,789.61				6,901.11

明治43年～大正4年は「松魚船益勘定」、大正5年～昭和18年は「第1・5・8 東洋丸持歩勘定帳」(北原吉右衛門氏蔵)より作成。

第2表 第1・5・8 東洋丸船中持分船徳勘定(貸方の部)

費目 年度	純 船 徳	償却積立金	利 子 収 入	本 船 船 体 分 金	他船持分から の振替入金	船元からの 払 込	奨 励 金 分 等	合 計	本年度差益	残 高
明治43 44	1,088.627	700.00	50.71	(東洋丸) 875.00			255.65	1,839.337	945.024	1,836.846
大正 1	952.238	100.00	78.76					2,261.648	1,717.334	3,554.18
2	1,160.973	500.00						1,660.973	△ 3,054.18	500.00
3	1,081.647	500.00	39.78					1,621.427	539.78	1,039.78
4	1,503.451	1,000.00	72.73					2,576.181	1,072.73	2,112.51
5	1,042.329	750.00	152.67				69.30	2,014.299	2,014.299	4,126.809
6	179.726	150.00	288.82					618.546	△ 3,244.312	882.497
7	670.768	1,054.183	61.74					1,786.691	1,091.063	1,973.56
8	1,645.263	1,000.00	138.97					2,784.233	1,138.973	3,112.533
9	1,783.766	1,000.00	217.84					3,001.606	1,217.846	4,330.379
10	1,000.395	350.00	303.10					1,653.495	653.10	4,983.479
11	1,735.575	750.00	348.81	(1 東洋丸) 3,650.00	(2 東洋丸) 10,061.714	1,000.00	592.255	3,834.385	2,674.385	7,657.864
12	6,435.35	3,000.00	210.00		546.385	4,600.00		28,339.319	△ 4,657.861	3,000.003
13	3,659.755	3,000.00	421.74		(2 東洋丸) 546.385	793.86		8,210.00	3,210.00	6,210.00
14	1,479.298	1,000.00	514.10					2,901.038	1,421.745	7,631.748
昭和 1	4,058.44	2,000.00	169.76				100.00	6,572.54	△ 5,186.82	2,444.928
2	1,756.75	2,500.00	148.23					3,216.71	653.10	1,791.828
3	3,777.63	2,000.00	60.46		(3 東洋丸) 437.84			6,025.86	2,213.85	4,005.678
4	4,841.105	1,000.00	169.76					7,839.405	△ 1,679.52	2,326.158
5	1,779.555	2,500.00	168.07					2,949.315	74.985	2,401.143
6	1,229.765	900.00	71.57					2,147.835	△ 1,479.355	921.788
7	964.95	3,250.00		(1 東洋丸) 3,275.00		3,915.79		1,936.52	1,447.83	1,369.618
8	4,402.25	4,000.00		4,855.471	(3 東洋丸) 1,622.328	1,307.742		15,558.78	△ 17,188.91	△ 15,819.292
9	2,871.97	2,000.00		57.827	(3 東洋丸) 1,034.576	200.00		14,565.463	11,574.193	△ 4,245.099
10		654.485	40.79	(東洋丸)				6,595.125	5,061.055	815.956
11	1,707.955	1,500.00			(3 東洋丸) 568.011	1,797.505		895.275	540.475	275.481
12	1,861.975	1,750.00	54.14					4,242.521	△ 927.651	1,203.132
13	1,324.13	1,150.00	133.15					3,666.115	1,733.525	2,936.657
14	3,376.475	3,000.00	201.97					4,972.796	1,896.716	4,833.373
15			299.52					7,358.445	2,663.055	7,496.428
16	11,250.00	2,000.00	241.24	(5 東洋丸) 15,378.603	(3 東洋丸) 23,782.065	4,140.323		689.552	△ 1,464.54	6,031.878
17	16,117.78	7,429.60				839.332		17,631.563	△ 1,343.552	4,688.366
18	徴 用		747.15					68,117.78	20,869.09	25,557.416
								747.15	△ 6,153.96	19,403.456

明治43年～大正4年は「松魚船益勘定」、大正5年～昭和18年は「第1・5・8 東洋丸持歩勘定帳」(北原吉右衛門氏蔵)より作成。

第3表 第2・3 東洋丸船中持分船徳勘定（借方の部）

年度	費目	会社立替分への返済	船中船方への支払	本船持分負担	他船持分への振替払	利子払	合計
大正 5		166.32		3,564.132 (2 東洋丸)			3,730.452
6			1,937.061				1,937.067
7			2,444.35				2,444.35
8		180.38	2,447.17				2,627.55
9		240.45	2,896.515				3,136.965
10							
11			2,489.66		(1 東洋丸) 10,061.714		12,551.374
12			1,546.385				1,546.385
13			545.52				545.52
14		1,750.00	1,539.60				3,289.60
昭和 1							
2							
3			2,964.70	(3 東洋丸) 8,787.34			11,752.04
4		36.85	835.00	6,500.00 (3 東洋丸)			7,371.85
5		76.16	1,094.72			498.40	1,669.28
6			876.00			484.84	1,360.84
7			22.02			242.60	264.62
8		225.31	95.00				320.31
9		38.45	1,210.00		(5 東洋丸) 1,622.328		2,870.778
10		50.24	1,775.50				1,825.74
11		15.63			(5 東洋丸) 1,034.576		1,050.206
12							
13			1,130.00		(5 東洋丸) 568.011		1,698.011
14		19.38					19.38
15		47.52					47.52
16		13.68	5,100.00		(5 東洋丸) 2,363.00		7,476.68
17		238.52	1,806.50		23,782.065 (8 東洋丸)		25,827.085

「第2・3 東洋丸持歩勘定帳」（北原吉右衛門氏蔵）より作成。

第4表 第2・3東洋丸船中持分船徳勘定（貸方の部）

費目 年度	純 船 徳	償却積立金	利 子 収 入	本 船 船 体 処 分 金	他 船 持 分 からの振替 金	船元からの 払 込	奨 励 金 一 等	合 計	本年度差益	残 高
大正 5	1,937.067	1,500.00	83.16		3,647.292 (1東洋丸)			3,730.452	1,500.00	1,500.00
6	2,444.35	2,000.00	105.00					3,437.067	2,105.00	3,605.00
7	2,447.179	2,250.00	252.35					4,549.35	2,321.979	5,926.979
8	3,136.965	1,000.00	414.82					4,551.785	1,414.82	7,341,799
9	1,456.045	750.00	513.87					2,719.915	2,719.915	10,061.714
10										
11	2,489.665	750.00						3,239.665	△ 9,311.709	750.005
12	1,546.385	1,000.00	66.93					2,613.315	1,066.93	1,816.935
13	545.525	400.00	93.44					1,038.965	493.445	2,310.38
14	994.815	500.00	44.80					1,539.615	△ 1,749.985	560.395
昭和 1	162.455	750.00	54.95					217.405	217.405	777.80
2	1,266.685	750.00	62.16	(2東洋丸)	(1東洋丸)			2,078.845	2,078.845	2,856.645
3	3,754.175	2,000.00	193.97	1,412.50	3,880.695	500.00		9,634.87	△ 2,117.17	739.475
4								1,648.17	△ 5,723.68	△ 4,984.205
5	805.035	500.00						1,805.035	135.755	△ 4,848.45
6	2,032.78	1,750.00						3,782.78	2,421.94	△ 2,426.51
7	1,515.475	850.00						2,365.475	2,100.855	△ 325.655
8	2,077.625	1,750.00						3,827.625	3,507.315	3,181.66
9	982.32	600.00						1,582.32	△ 1,288.458	1,893.202
10	976.445	500.00	94.66			135.00		1,706.105	△ 119.635	1,773.567
11	903.37	750.00	88.44					1,741.81	691.604	2,465.171
12	414.68	500.00	107.58					1,022.26	1,022.26	3,487.431
13	1,254.995	1,100.00	156.91					2,511.905	813.894	4,301.325
14	1,645.26	1,500.00	180.64					3,325.90	3,306.52	7,607.845
15	3,816.705	4,000.00	304.56					8,121.265	8,073.745	15,681.59
16			551.45	(3東洋丸)			115.00	666.45	△ 6,810.23	8,871.36
17	3,590.615	2,875.00	403.47	10,086.64				16,955.725	△ 8,871.36	

「第2・3東洋丸持歩勘定帳」(北原吉右衛門氏蔵)より作成。

第5表 高砂丸北原船中持分船徳勘定 (借方の部)

	会社立 替分へ の返済	船中船方 への支払	本船持分 負担	他船持 分への 振替払	利子払	合 計
大正 14 昭和 1		1,079.30	7,080.938		7,080.938	
2		393.67			125.401	204.70
3		798.30			94.82	488.49
4					74.13	872.43
5					42.20	42.20
6					64.10	64.10
7		85.50			74.83	160.33
8					64.80	64.80
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15		1,002.074				1,002.074

「高砂丸持歩勘定帳」(北原吉右衛門氏蔵)より作成。

第6表 高砂丸北原船中持分船徳勘定 (貸方の部)

	純 船 徳	償 却 積立金	本 船 船体 処分金	他船持分 からの 振替入金	船元から の 払 込	奨励金 分一	合 計	本 年 度 差 益	残 高
大正 14 昭和 1	1,017.072	520.00		785.852(大洋丸) 1,047.50(1東洋丸) 2,569.994(2世代丸)			5,940.418	△1,140.52	△1,140.52
2	896.992	500.00					1,396.992	192.292	△ 948.228
3	415.32	280.00					695.32	206.83	△ 741.398
4	790.788	400.00					1,190.788	318.358	△ 423.04
5					176.174		176.174	133.974	△ 289.066
6	160.718	100.00			128.374	85.50	213.874	149.774	△ 139.292
7	90.04	100.00					260.718	100.388	△ 38.904
8							190.04	125.24	86.336
9	222.878	200.00			39.528		39.528	39.528	125.864
10							422.878	422.878	548.742
11		210.00			347.136		347.136	347.136	895.878
12					212.53		210.00	210.00	1,105.878
13					9.186		212.53	212.53	1,318.408
14	休 業						9.186	9.186	1,327.594
15			1,500.00				1,500.00	497.926	1,825.52

「高砂丸持歩勘定帳」(北原吉右衛門氏蔵)より作成。

なつたので、さきの東洋丸を改名した。船徳勘定残高からの振替入金でまかなわれ、このための借入・増資は行なわずにすましている（第三〇四表）。したがって資本形成上の基礎づくりは、この時期にひとまず完成されたとみられよう。

大正十一年には第一東洋丸が代船建造された（第一図）。

大正十一年三月進水東洋丸持歩（五歩）⁽⁸⁾

船価五一、九四六円八〇銭ノ半分	三二、九七三円四九銭
右一号東洋丸持歩ヨリ入ル	一一、三〇七円八六銭四厘
二号東洋丸持歩ヨリ入ル	一〇、〇六一円七一銭四厘
船元現金払込	二、三〇〇円
船元現金払込	二、三〇〇円

船価五一、九四六円は、東海遠洋漁業株式会社と折半出資で、半額の船中負担分二五、九七三円は、一一、三〇七円が第一東洋丸勘定の償却積立金と旧船体売却処分金でまかなわれ、一〇、〇六一円が第二東洋丸勘定の残高からの振替入金となっている（第三〇四表）。そして残余四、六〇〇円は船元北原家の出資金であるが、その一部二、三〇〇円は次のとおり東海遠洋漁業株式会社の立替（北原家の借金）であつた（第二表）。

借入金之証⁽⁹⁾

一金貳千参百円也

但シ東洋丸造船持分資金調達ニ付

右金員正ニ借用候事実正也

一、利息ハ年壹割トシ月割計算ノ事

一、返済期日ハ大正拾壹年拾貳月三十一日迄トス

一、返済方法ハ該船船徳ヨリ支払皆済スル事

依而借用金如件

志太郡焼津町北新田壹番地

借用主 北原 吉太郎

大正拾壹年六月拾三日

東海遠洋漁業株式会社御中

今回は造船費が著しく膨張したために、船中負担分の一割弱が東海遠洋漁業株式会社の立替とはなつたが、資金の大部分は第一東洋丸と第二東洋丸の両会計でまかなわれている。またこの時期になつて、船中内における船元の資力と地位が向上してきたことも注目される。

改正船持人名⁽¹⁰⁾

参株	鈴木 平次郎
壹株半	鈴木 熊吉
壹株	川口 庄平

貳株	秋山松吉	貳株半	北原吉平
貳株	秋山寅太郎	半株	北原安吉
壹株	中野兼吉	壹株	山下静一
貳株	北原金太郎	半株	亀沢勘吉
壹株半	北原庸吉	壹株半	原田仙吉
貳株半	加藤長太郎	壹株	天野松吉
参株	北原金右衛門	参株	天野龜吉
貳株半	北原丑之助	壹株	天野吉右衛門
貳株	鈴木清右衛門	半株	酒井太助
壹株	山崎利吉	壹株	徳田清吉
貳株	北原倉吉	壹株	北原為吉
壹株	北原銀太郎	半株	下村亮
壹株	北原友吉	半株	小梁泰吉
壹株	鈴木仙太郎	参株	北原吉太郎
壹株	近藤伊右衛門	壹株	北原鉄吉
壹株	北原金太郎	合計五十九株半	
壹株	北原清三	昭和三年、第二東洋丸の代船第三東洋丸が東海遠洋漁業株式会社との折半出資で建造された（第一図）が、造船費一七、五七四円の船中負担額八、七八七円は、積立金残高と第一東洋丸勘定からの振替入金三、八八〇円で充当したが不足を生じ、赤字が昭和七年まで続く（第三、四表）。この時期は不況期でもあり、第一東洋丸勘定からの振替	
壹株半	北原新吉		
壹株半	北原音吉		
壹株半	北原直吉		
壹株	町田権三郎		
壹株	鈴木弥七		

もままならず、この間にかかなりの利子払いが計上されていることから、おそらく東海遠洋漁業株式会社の立替があったと考えられる。ついで昭和七年に、第一東洋丸の代船第五東洋丸が東海遠洋漁業株式会社と折半出資で建造された(第一図)が、造船費六一、二〇〇円のうち船中負担分三〇、六〇〇円の内訳は、次のとおりであった。

第五東洋丸船価	六一、二〇〇円
右船中持歩五歩ニテ	三〇、六〇〇円
船元預り金振向ケ	五、九五二円三六錢
船元現金持込	三、九一五円七九錢
借り	二〇、七三一円八五錢

船元預り金五、九五二円とあるのは船中償却積立金の預り金で、船元持込金三、九一五円が直接の船元出資金である。当初の借入れ金二〇、七三一円は、昭和七〇八年度と赤字決算を続けながらこれを返済していく方法をとっているので、この分は前回大正一一年第一東洋丸代船建造時と同じく、東海遠洋漁業株式会社の立替であらう(第一、二表)。この返済には、償却積立金の他に旧船第一東洋丸船体・機械処分金と、第三東洋丸勘定からの三度にわたる振替入金、さらに船元からの入金を充てる等不況期の中にあつて苦心のあとがみえる(第三、四表)。ここでは一度確立したかにみえた船中の資本形成は、昭和恐慌期の中であつた後退したと考えられる。しかし船中内の船元と

船方の地位は、さらに分化しつつあることも看過できない。

昭和七年造船増資⁽¹²⁾

二株	鈴木 平次郎
一株半	鈴木 権吉
一株	川口 庄平
二株	秋山 金一郎
二株	秋山 寅太郎
一株	中野 兼吉
二株	北原 金太郎
一株半	北原 寅吉
二株半	北原 勇一
三株	北原 金右衛門
二株	鈴木 清右衛門
一株	山崎 利吉
一株	北原 銀太郎
一株半	加藤 熊吉
一株	北原 友吉
一株	鈴木 仙太郎
一株	近藤 伊右衛門
二株	北原 倉吉
一株	北原 清三

三株	北原新吉
二株	北原音吉
一株半	北原直吉
一株半	町田権三郎
一株	鈴木弥七
二株	北原吉平
半株	北原安吉
一株	山下静一
一株半	原田仙吉
一株	天野松吉
二株	天野亀吉
一株	天野吉右エ門
一株	天野由太郎
半株	酒井太助
三株	北原吉太郎
半株	亀沢勘吉
一株	加藤新吉
一株	鈴木新太郎
半株	北原次郎

そして昭年一七年、戦前では最後の代船建造となって第八東洋丸が東海遠洋漁業株式会社と折半出資で建造された(第一図)。

昭和十七年度新造第八東洋丸船価八万円也
右船中持歩五歩金四万円也

船元五号持歩ヨリ振替 八、一〇八円九六錢八厘

船元三号持歩ヨリ振替 一一、〇五一円七〇錢

船元現金持込 八三九円三三錢二厘

船方五号持歩ヨリ振替 八、一〇八円九六錢七厘

船方三号持歩ヨリ振替 一一、八九一円三錢三厘¹³⁾

船中負担分四〇、〇〇〇円の内訳は、まず第五東洋丸の廃船による積立金と船体・機械売却処分金等同船会計からの振替入金二三、七八二円、第五東洋丸勘定から旧船売却と積立金による一五、三七八円、残る不足分八三九円を船元が出金した(第一〜四表)。しかし本船は、昭和一七年度を操業しただけで、翌一八年には陸軍省の徴傭を受け、昭和一九年ラバウル沖で沈没した。

昭和拾七年度ヨリ改正持株人名¹⁴⁾

貳株	鈴木重太郎
壹株半	鈴木権吉
壹株	川口庄平
貳株	秋山金一郎
貳株	秋山寅太郎
壹株半	北原寅吉

貳株半	北原 勇一
貳株	北原 金右衛門
壹株	北原 喜代一
貳株	鈴木 寅吉
壹株	北原 銀太郎
壹株半	加藤 熊吉
壹株	北原 友吉
壹株	鈴木 仙太郎
壹株	近藤 伊右衛門
壹株	北原 清三
貳株	北原 倉吉
壹株	北原 桐太郎
壹株半	北原 平太郎
半株	岩本 留吉
壹株半	北原 直吉
壹株半	町田 権吉
壹株	鈴木 弥七
貳株	北原 吉平
半株	北原 安吉
壹株	山下 静一
壹株半	原田 与七
壹株	天野 松吉

貳株	天野 亀吉
壹株	天野 吉太郎
半株	酒井 太助
参株	北原 吉太郎
壹株	鈴木 新太郎
計四拾六口半	

戦前における東洋丸船中の鯉船の建造・経営は以上のとおり二隻の系統で続けられたが、同船中および船元北原家がこの間に建造経営した他の鯉船についても若干ふれておこう。大正一四年に高砂丸を東海遠洋漁業株式会社、東洋丸船中、東海丸船中の三者による共同出資で建造している。東海丸は船元見崎家が北原家と姻戚関係にあたる。その出資比率は次のとおりである。

高砂丸船価金三五、四〇四円六九銭ノ持方	
五歩金 一七、七〇二円三四銭五厘	丸東会社
三歩金 一〇、六二二円四〇銭七厘	見崎長五郎船中
二歩金 七、〇八〇円九三銭八厘	北原吉太郎船中
右第一東洋丸持歩ヨリ振替ル	一、〇四七円五〇銭
当目第二事代丸持歩ヨリ振替ル	二、五六九円九九銭四厘
当目大洋丸持歩ヨリ振替ル	七八五円八五銭二厘
残り借リ	二、六七七円五九銭二厘 ¹⁵⁾

造船費三五、四〇四円の内、東洋丸船中負担分が七、〇八〇円で、

その源泉内訳は第一東洋丸勘定から一、〇四七円、隣村当目の第二事代丸の出資勘定より二、五六九円、同じく当目の太平洋丸出資勘定より七八五円を振替入金し、残る二、六七七円は東海遠洋漁業株式会社の立替で、次年度以降の利益によって返済の予定であった。しかし本船は経営成績がすぐれず、船徳勘定は初期には赤字を続け、後期には船方への支払いが行なわれず、帳簿上はともかく船元北原家ではたびたび不足分補填のための出金を行ったが、昭和一四年には休業し、翌一五年には売却された(第五・六表)。

これまで明治三四年から昭和一七年まで約四〇年間にわたる、東洋丸船中とその船元北原家の資本形成(＝漁船所有)の条件をみてきた。その結果、当時まだ資力に乏しかった船中にとっては、出資者としての船主法人東海遠洋漁業株式会社の存在は大きく、資金の半額を依存するばかりでなく、船中負担分の不足金の立替も受けた。しかし大正五年頃には、償却金の内部留保で漁船を二隻に増やし、以後両船の船徳会計は連結決算では、ほぼ黒字を維持した。しかしその資産は、東海遠洋漁業株式会社の半額所有の下にあったので、完全な自立経営とはいえない。この中において確実に資力をつけていったのは船元層で、北原家の場合、船中関係の二隻の外にも高砂丸のように他の船中と共に同経営も行った。この場合資金的には、東洋丸船中の所有というよりも出資比率から北原家の事業的色彩が濃い。こうした船元の船中内での上向傾向は、戦後における船主法人からの船元層の経営自立を準備

していくことになった。

一方東洋丸船中が関係した鯉船でも、直接船方が乗組んだ二隻の東洋丸以外は船徳計算で成績があがらなかったのは何故か。これには経営全般にわたる分析を経なければ正確な解答を引き出すことができないが、鯉漁業の漁撈活動が手労働の熟練と協労組織に基礎をおいているためではなからうか。資本は乗組員集団としての船中労働力の包摂に成功しないかぎり、高い投資効果は望めない。次章では船中と労働力組織の問題についてふれてみよう。

(注)

- (1) 東海遠洋漁業株式会社『同社三十年史』昭和一二年 三一～三二頁。
- (2) 「約定書」北原吉右衛門氏蔵。
- (3) 「松魚船人名帳入費計算」北原吉右衛門氏蔵。文中松魚は鯉の当て字(筆者注)。
- (4) 前掲書(1) 六五～八六頁。
焼津漁業協同組合『焼津漁業史』昭和三九年 一六二～一六六頁。
大海原宏「焼津における地場資本の形成とカツオ漁業の資金調達について―明治・大正期の漁業経営を中心に―」東京水産大学論集 第四号 昭和四四年 二三～四〇頁。
- (5) 「松魚船益勘定」北原吉右衛門氏蔵。文中丸東は東海遠洋漁業株式会
社、内は船元北原吉太郎氏(筆者注)。
- (6) 前掲書(5)。
- (7) 前掲書(1) 一五～三〇頁。
焼津漁業協同組合『焼津漁業史』昭和三九年 一〇四～一一二頁。

- (8) 「第一東洋丸持歩勘定書帳」北原吉右衛門氏蔵。
- (9) 「借用金之証」北原吉右衛門氏蔵。
- (10) 「鯉船船徳帳」北原吉右衛門氏蔵。
- (11) 「第五東洋丸持歩勘定書帳」北原吉右衛門氏蔵。
- (12) 前掲書(10)。
- (13) 「第八東洋丸持歩勘定書帳」北原吉右衛門氏蔵。
- (14) 前掲書(10)。
- (15) 「高砂丸持歩勘定書帳」北原吉右衛門氏蔵。文中の見崎長五郎船中は東海丸船中、丸東会社は東海遠洋漁業株式会社(筆者注)。

三 労働組織としての船中

焼津の鯉船の乗組員は、船中を單位に組織され俗に一船一家主義と呼ばれる。すなわち世襲の船主権を有する船元を頂点に、同じく船主権を有する船元の同族からなる乗組員の船方から構成されている。⁽¹⁾そして船主権を有する同族である船方の乗組む船は、自ら固定し世襲されていく。このことはまた次のような取きめがある点からすれば、船主側からも熟達した乗組員の確保と協労働組織の維持が、経営的要求として古くからあったことを示している。

漁方規定取極之事⁽²⁾

一、(略)

一、鯉漁船之儀銘々乗組之者拘置候へ共万一乗組之内勝手ニ他之船江乗組度申出候共其船主方ニ而決而取扱申間敷候尤三ヶ村之内誰

船かきらず乗組之者少人数ニ而漁業差支候節ハ船主共相對之上漁事家業差支無之様取計可致候事

(以下略)

嘉永四亥年二月

夏漁船持主

城腰村 九名(略)

鰯ヶ島村 九名(略)

北新田村 九名(略)

漁業約定証⁽³⁾

一、乗組之者猥ニ外船ニ乗組申間舗無拋場合ニ相成候ハバ船子一同示談之上可致ス事

一、鯉漁業之時節ハ概略五月一日ヨリ十月三十一日迄ヲ限トス尤モ時宜ニ寄日限伸縮ハ一同協議之上適宜ニ取定申ヘキ事

この組織は、明治四一年から船中が東海遠洋漁業株式会社と折半出資によって鯉船を建造経営することになってからも、変ることなく続いた。

ところで、近世以来戦前の焼津の漁業は、前記「漁業約定証」のとおり五月から十月まで主力の鯉漁(夏漁あるいは大漁と呼ぶ)を行い、他の季節には裏作として鮪・鯖漁(冬漁あるいは小漁と呼ぶ)を営んだ。そして夏漁は船中一同が鯉船(大舟と呼ぶ)へ乗船の義務をもち、

冬漁は小集団ごとに小型船（小舟と呼ぶ）に分れた。東洋丸船中関係の小舟には汐波丸、重右衛門丸、新喜丸があり、かつては平七丸、九平丸もあった。これらの小舟も船中内でさらに小同族集団を形成し、その内外で分家・別家・姻戚関係を通じて相互に結ばれている（第二図）。今これを明治四五年、大正一五年、昭和一五年における東洋丸船中の出資者（船持人名）および乗船者と同族関係を小舟船主との関係で示せば次のとおりである。⁽⁴⁾

明治四五年東洋丸船持人名

鈴木 平次郎	(重右衛門丸船主)
鈴木 熊吉	(重右衛門丸別家)
北原 徳藏	(東洋丸別家)
北原 倉吉	(喜洋丸船主弟喜右衛門息)
北原 徳右衛門	(喜洋丸船主)
秋山 仙藏	(汐波丸別家)
加藤 長太郎	(東洋丸別家)
北原 梅吉	(喜洋丸船主弟)
北原 寅吉	(東洋丸別家)
鈴木 藤吉	
北原 鉄太郎	(喜洋丸別家)
北原 次郎兵衛	(東洋丸別家)
北原 音吉	(喜洋丸船主弟)

鈴木 福太郎	(喜洋丸別家)
北原 清三	
北原 源藏	
北原 熊吉	(東洋丸別家)
北原 新吉	(新喜丸船主)
鈴木 九平	(重右衛門丸別家)
北原 丑之助	(東洋丸別家徳藏息)
原田 仙吉	(東洋丸乗組員)
天野 亀吉	(汐波丸船主姻戚徳次郎息)
天野 松吉	(右亀吉弟)
村松 万吉	
片山市平	(東洋丸乗組員)
北原 吉太郎	(東洋丸船元)
秋山 伊之助	(汐波丸船主)
秋山 松吉	(汐波丸船主弟)
北原 銀藏	
増田 音吉	
山崎 利吉	(東洋丸乗組員)
長谷川 音吉	
山下 静一	(東洋丸乗組員)
鈴木 弥七	(重右衛門丸別家)
北原 友吉	(喜洋丸別家)

龜沢勇次
(喜洋丸船員)

明治四五年度東洋丸乗船者

北原新吉（新喜丸船主）

鈴木 平次郎
(重右衛門丸船主)

天野 亀吉
(汐波丸船主姻戚徳次郎息)

天野松吉（右亀吉弟）

鈴木藤吉

北
原
源
藏

原田仙吉
(東洋丸乗組員)

北原 徳蔵（東洋丸別家）

北原 金右衛門
(喜洋丸船主息)

秋山松吉
(汐波丸船主弟)

秋山寅太郎（汐波丸船主息）

增田音吉

北原熊吉（東洋丸別家）

山崎利吉（東洋丸乗組員）

北原倉吉
(喜洋丸船主弟喜右衛門息)

北原兼吉（喜洋丸船主弟梅吉息）

北原元吉（東洋丸別家寅吉祖父）

北原清三（喜洋丸別家）

北原 平太郎
(喜洋丸船主弟音吉息)

町田 権三郎（新喜丸乗組員）

北原直吉（東洋丸船元弟）

北原銀藏

北原吉平
(東洋丸別家次郎兵衛息)

山下静一（東洋丸乗組員）

北原友吉（喜洋丸別家）

鈴木 福太郎

鈴木熊吉
(重右衛門丸別家)

北原音吉（喜洋丸船主弟）

北原 金太郎（喜洋丸船主弟梅吉息）

北原 鉄太郎（喜洋丸別家）

北原 銀太郎（喜洋丸船主弟）

秋山松藏
(汐波丸別家仙藏息)

片山市平（東洋丸乗組員）

北原安吉（東洋丸別家次郎兵衛息）

町田権吉（新喜丸乗組員権三郎息）

北原寅之助（東洋丸別家寅吉父）

北原為吉（喜洋丸別家鉄太郎弟）

鈴木重太郎
(重右衛門丸船主)

龜沢勘吉（喜洋丸乗組員勇次息）

北原寅吉（喜洋丸別家）

鈴木弥七
(重右衛門丸別家)

秋山周吉（汐波丸別家仙蔵息）

D B A B B A A A A B A B A A A A A A A

B A A B B B B D B A B B A B A A A A A B A B

北原 徳右衛門	(喜洋丸船主)	A	北原 金右衛門	(喜洋丸船主)
北原 吉太郎	(東洋丸船元)	A	北原 丑之助	(東洋丸別家徳藏息)
北原 源之丞	(東洋丸船元息)	B	鈴木 清右衛門	(重右衛門丸別家)
加藤 長太郎	(東洋丸別家)	A	山崎 利吉	(東洋丸乗組員)
亀沢 勇次	(喜洋丸乗組員)	A	北原 倉吉	(喜洋丸船主叔父喜右衛門息)
鈴木 九平	(重右衛門丸別家)	A	北原 銀太郎	(喜洋丸船主叔父)
北原 梅吉	(喜洋丸船主弟)	A	北原 友吉	(喜洋丸別家)
下村 亮	(新喜丸乗組員)	D	鈴木 仙太郎	(重右衛門丸別家)
町田 権平	(新喜丸乗組員権三郎息)	D	近藤 伊右衛門	(東洋丸乗組員)

注

A (出資者船持本人) B (出資者の二親等以内の同族) C (出資者の二親等以外の同族および姻戚) D (出資者と同族関係のないもの)

大正一五年東洋丸船持人名

鈴木 平次郎	(重右衛門丸船主)	北原 新吉	(新喜丸船主)
鈴木 熊吉	(重右衛門丸別家)	北原 音吉	(喜洋丸船主叔父)
川口 庄平	(汐波丸船主姻戚)	町田 権三郎	(新喜丸乗組員)
秋山 松吉	(汐波丸船主叔父)	北原 吉平	(東洋丸別家次郎兵衛息)
秋山 寅太郎	(汐波丸船主)	北原 安吉	(東洋丸別家次郎兵衛息)
中野 兼吉	(新喜丸船主姻戚)	山下 静一	(東洋丸乗組員)
北原 金太郎	(喜洋丸船主叔父梅吉息)	亀沢 勘吉	(喜洋丸乗組員)
北原 寅吉	(東洋丸別家)	原田 仙吉	(東洋丸乗組員)
加藤 長太郎	(東洋丸別家)	天野 吉右衛門	(汐波丸船主姻戚徳次郎息)

天野 龜吉 (右吉右衛門弟)
 天野 松吉 (右吉右衛門弟)
 酒井 太助 (東洋丸乘組員)
 德田 清吉 (東洋丸乘組員)
 北原 為吉 (喜洋丸別家)
 下村 亮 (新喜丸乘組員)
 小梁 泰治 (重右衛門丸船主姻戚)
 北原 吉太郎 (東洋丸船元)
 片山 市太郎 (東洋丸乘組員)
 北原 鉄太郎 (喜洋丸別家)

大正一五年度東洋丸乗船者

川口 庄平 (汐波丸船主姻戚)
 鈴木 平次郎 (重右衛門丸船主)
 鈴木 重太郎 (重右衛門丸船主息)
 鈴木 吉之助 (重右衛門丸船主息)
 鈴木 兼吉 (重右衛門丸別家九平息)
 小梁 泰治 (重右衛門丸船主姻戚)
 小梁 勇次 (右泰治息)
 鈴木 權吉 (重右衛門丸別家熊吉息)
 秋山 松藏 (汐波丸別家仙藏息)
 秋山 金一郎 (汐波丸船主叔父松吉息)

B C B B A C B B A A

秋山 兼吉 (汐波丸別家)
 秋山 常吉 (汐波丸別家)
 天野 徳次郎 (汐波丸船主姻戚)
 秋山 寅太郎 (汐波丸船主)
 秋山 仁助 (汐波丸船主弟)
 中野 兼吉 (新喜丸船主姻戚)
 増田 為吉 (東洋丸船元姻戚)
 北原 金太郎 (喜洋丸船主叔父梅吉息)
 松村 兼吉 (右金太郎弟)
 北原 寅吉 (東洋丸別家)
 加藤 長太郎 (東洋丸別家)
 加藤 熊吉 (右長太郎息)
 北原 金右衛門 (喜洋丸船主)
 北原 喜代一 (喜洋丸船主息)
 北原 吉五郎 (喜洋丸船主息)
 北原 徳藏 (東洋丸別家丑之助父)
 佐藤 由平 (新喜丸乘組員)
 武政 源太郎 (東洋丸別家北原吉平姻戚)
 武政 銀作 (右源太郎弟)
 加藤 新吉 (東洋丸別家長太郎息)
 下村 亮 (新喜丸乘組員)
 北原 為吉 (喜洋丸別家)

A A B C C D B B B A B A A B A C A B A B C C

浜田半次	(東洋丸乗組員)	D	北原友吉	(喜洋丸別家)	A
北原倉吉	(喜洋丸船主叔父喜右衛門息)	A	北原吉太郎	(東洋丸船元)	A
北原幸太郎			鈴木弥七	(重右衛門丸別家)	A
北原時松			北原音吉	(重右衛門丸船主叔父)	A
北原延三郎			岩本留吉	(東洋丸乗組員)	D
伊久美兼吉	(東洋丸乗組員)	D	北原吉平	(東洋丸別家次郎兵衛息)	A
北原銀藏			北原次郎吉	(右吉平弟)	B
徳田清吉	(東洋丸乗組員)	A	北原安吉	(右吉平弟)	A
山崎利吉	(東洋丸乗組員)	A	増田弥一	(東洋丸乗組員)	D
鈴木藤平	(重右衛門丸別家熊吉息)	B	鈴木新太郎	(重右衛門丸船主息)	B
鈴木利夫			北原源之丞	(東洋丸船元息)	B
鈴木仙太郎	(重右衛門丸別家)	A	北原忠吉	(東洋丸船元息)	B
北原金作	(東洋丸船元息)	B	北原徳次郎	(東洋丸船元息)	B
北原清三	(喜洋丸別家)	A	北原清	(東洋丸別家)	C
北原桐太郎	(新喜丸船主息)	B	北原喜平		
横山九左衛門	(新喜丸船主息)	B	片山市太郎	(東洋丸乗組員)	A
北原健吉	(新喜丸船主息)	B	原田仙吉	(東洋丸乗組員)	A
北原音平			原田与七	(右仙吉息)	B
北原直吉	(東洋丸船元弟)	A	亀沢勘吉	(喜洋丸乗組員)	A
秋山茂	(東洋丸船元弟直吉在所)	B	吉田敏夫	(東洋丸乗組員)	D
町田権三郎	(新喜丸乗組員)	A	天野亀吉	(汐波丸船主姻戚徳次郎息)	A
町田権吉	(新喜丸乗組員権三郎息)	B	天野松吉	(右亀吉弟)	A

天野 忠次	(右亀吉息)	B	北原 勇一	(東洋丸別家丑之助息)
山下 静一	(東洋丸乗組員)	A	北原 金右衛門	(喜洋丸船主)
天野 吉太郎	(右亀吉甥)	B	北原 喜代一	(喜洋丸船主息)
酒井 太助	(東洋丸乗組員)	A	鈴木 清右衛門	(重右衛門丸別家)
北原 良一	(喜洋丸別家鉄太郎甥)	C	北原 銀太郎	(喜洋丸船主叔父)
田中 古十	(東洋丸船元父在所)	C	加藤 熊吉	(東洋丸別家長太郎息)
田中 勇平	(右古十別家)	C	北原 友吉	(喜洋丸別家)
北原 新吉	(新喜丸船主)	A	鈴木 仙太郎	(重右衛門丸別家)
北原 乙右衛門			近藤 伊右衛門	(東洋丸乗組員)
秋山 伊之助	(汐波丸船主父)	B	北原 倉吉	(喜洋丸船主叔父喜右衛門息)
北原 梅吉	(喜洋丸船主叔父)	B	北原 清三	(喜洋丸別家)
注				
A、Dは明治四五年度注記に同じ。				
昭和一五年東洋丸持人名				
鈴木 重太郎	(重右衛門丸船主)		町田 権三郎	(新喜丸乗組員)
鈴木 権吉	(重右衛門丸別家熊吉息)		鈴木 弥七	(重右衛門丸別家)
川口 庄平	(汐波丸船主姻戚)		北原 吉平	(東洋丸別家次郎兵衛息)
秋山 金一郎	(汐波丸船主叔父松吉息)		北原 安吉	(東洋丸別家次郎兵衛息)
秋山 寅太郎	(汐波丸船主)		山下 静一	(東洋丸乗組員)
中野 兼吉	(新喜丸船主姻戚)		原田 与七	(東洋丸乗組員仙吉息)
北原 寅吉	(東洋丸別家)		天野 亀吉	(汐波丸船主姻戚徳次郎息)
			天野 松吉	(右亀吉弟)

天野 吉太郎 (右亀吉甥)
 酒井 太助 (東洋丸乗組員)
 北原 吉太郎 (東洋丸船元)
 加藤 新吉 (東洋丸別家長太郎息)
 北原 音吉 (喜洋丸船主叔父)

昭和一五年度東洋丸乗船者

北原 源之丞 (東洋丸船元息)
 北原 吉右衛門 (右源之丞息)
 北原 徳次郎 (東洋丸船元息)
 北原 直吉 (東洋丸船元弟)
 北原 正義 (東洋丸船元弟直吉息)
 北原 清 (東洋丸別家)
 北原 金作 (東洋丸船元息)
 北原 銀一 (東洋丸船元弟直吉息)
 北原 吉平 (東洋丸別家次郎兵衛息)
 北原 吉郎兵衛 (右吉平息)
 北原 義市 (東洋丸別家吉平息)
 北原 勇一 (東洋丸別家丑之助息)
 北原 桐太郎 (新喜丸船主息)
 北原 太一 (新喜丸船主息)
 北原 金右衛門 (喜洋丸船主)

A	B	B	A	B	B	A	B	B	C	B	A	B	B	B	B	北原 喜代一	(喜洋丸船主息)	A			
鈴木 善一	鈴木 弥七	鈴木 吉之助	鈴木 新太郎	鈴木 重右衛門	鈴木 重太郎	北原 友吉	北原 音吉郎	北原 倉吉	北原 勝次	北原 好郎	北原 梅次	北原 良一	北原 伝三郎	北原 政次	北原 清三	北原 幸広	北原 銀太郎	北原 吉五郎	北原 太三九	北原 喜代一	
(重右衛門丸別家權吉息)	(重右衛門丸別家)	(重右衛門丸船主息)	(重右衛門丸船主息)	(重右衛門丸船主息)	(重右衛門丸船主)	(喜洋丸別家)	(右倉吉息)	(喜洋丸船主喜右衛門息)	(東洋丸別家寅吉息)	(喜洋丸船主叔父銀太郎息)	(喜洋丸船主叔父銀太郎息)	(喜洋丸別家鉄太郎甥)	(喜洋丸別家清三息)	(喜洋丸別家清三息)	(喜洋丸別家)	(喜洋丸船主叔父)	(喜洋丸船主叔父)	(喜洋丸船主息)	(喜洋丸船主息)	(喜洋丸船主息)	
B	A	B	B	B	A	A	B	A	B	B	B	C	B	B	A	B	A	A	B	B	A

鈴木藤平	(重右衛門丸別家權吉息)	B	田中勇太郎	(右古十別家)	C
鈴木仙太郎	(重右衛門丸別家)	A	田中勇吉	(右古十別家)	C
鈴木蓮司	(喜洋丸乗組員)	D	加藤熊吉	(東洋丸別家長太郎息)	A
鈴木寅吉	(重右衛門丸別家清右衛門息)	B	加藤新吉	(右熊吉弟)	A
鈴木甚太郎	(新喜丸乗組員)	D	加藤長吉	(右熊吉息)	B
秋山寅太郎	(汐波丸船主)	A	川口庄平	(汐波丸船主姻戚)	A
秋山兼次	(汐波丸船主息)	B	川口正市	(右庄平息)	B
秋山松吉	(汐波丸船主叔父)	B	川口平次	(右庄平息)	B
秋山金一郎	(右松吉息)	A	山下靜一	(東洋丸乗組員)	A
秋山茂	(東洋丸船元弟直吉在所)	B	山下正一	(右靜一息)	B
秋山兼吉	(汐波丸乗組員)	D	山下清	(右靜一息)	B
増田為吉	(東洋丸姻戚)	C	佐藤由平	(新喜丸乗組員)	D
増田恵作	(喜洋丸船主息)	B	佐藤鍼次	(右由平息)	D
増田弥一	(東洋丸乗組員)	D	大石貫次	(新喜丸乗組員)	D
増田駒吉	(東洋丸乗組員)	D	大石角吉	(東洋丸乗組員)	D
天野亀吉	(汐波丸船主姻戚徳次郎息)	A	大石平吉	(東洋丸乗組員)	D
天野松吉	(右亀吉弟)	A	中野兼吉	(新喜丸船主姻戚)	A
天野吉太郎	(右亀吉甥)	A	中野薫	(右兼吉別家)	C
天野忠次	(右亀吉息)	B	原田与七	(東洋丸乗組員)	A
天野徳次	(右亀吉息)	B	原田仙次郎	(右与七息)	B
田中古十	(東洋丸船元父姻戚)	C	芝田政雄	(東洋丸乗組員)	D
田中彦之丞	(右古十別家)	C	芝田英一	(右政雄弟)	D

横山 九左衛門	(新喜丸船主息)
小 梁 勇 司	(重右衛門丸船主姻戚泰治息)
武 政 源 太 郎	(東洋丸別家吉平姻戚)
松 村 兼 吉	(喜洋丸船主叔父梅吉息)
松 永 健 造	(東洋丸乗組員)
伊 久 美 幸 一	(東洋丸乗組員)
町 田 権 吉	(新喜丸乗組員権三郎息)
岩 本 留 吉	(東洋丸乗組員)
酒 井 太 助	(東洋丸乗組員)
近藤 伊右衛門	(東洋丸乗組員)
北 川 開 作	(喜洋丸乗組員)
山 口 仙 一	(東洋丸別家吉平姻戚)
池 田 実 藏	(東洋丸乗組員)
三 輪 辰 蔵	(東洋丸乗組員)
高 橋 藤 作	(東洋丸乗組員)
曾 根 久 行	(東洋丸乗組員)
松 本 竹 志	(東洋丸乗組員)
浜 田 半 次	(東洋丸乗組員)
河 本 栄 太 郎	(東洋丸乗組員)
浅 田 武 雄	(東洋丸乗組員)
良 知 金 平	(東洋丸乗組員)
塩 谷 栄 吉	(東洋丸船元弟直吉姻戚)

C D D D D D D D D D C D A A A B D D C C C B

注

A、Dは明治四五年度注記に同じ。

さらに各年度ごとの出資者名と出資口数を示したものが第七表である。代船建造ごとの増資で出資者がしだいに同族以外の乗船者の間にも広がっていくが、一方同族を中心とする相続も子供や別家に着実に受けつがれている。また乗船者も、船主の同族を中心とする出資者の親子兄弟・姻戚・別家等一族が大半を占めている。出資者が相続によって世襲されれば、出資者の縁者である乗船者も自ら一族が占め固定化する傾向にむかう。

この背景には、さきの「取極約定」の拘束もあるが、また収益分配における「子供代」の存在も影響している。これは、直接漁撈に従事しない一五歳未満の子供も収益分配の対象に加えたもので、将来の乗船者の確保と、「譜代の漁船」への乗船を義務づけることによって乗組員争奪の混乱をさけるためにおかれたものだという。⁽⁵⁾

昭和二年夏海七月⁽⁶⁾

大作 14	向寅 14	清政 14	庄一 14	政一 14	梅次 13
久一 13	天由 13	太一 12	好夫 12	汐政 11	清勝 11
栄作 11	天松女 10	利吉女 10	直銀 10	政次 10	倉逸 10
平吉 10	天亀 10	内金 10	松吉女 9	静清 8	由平子 8
倉音 7	権藤平 7	庄平次 7	与好 7	平雪 6	銀由 6

出資者および持株数の推移

北原徳藏		加藤長太郎・熊吉		鈴木重五郎・平次郎・重太郎		天野徳次郎		秋山松吉・金一郎		伊之助・寅太郎		秋山仙藏	北原熊吉	鈴木藤吉	秋山仁右衛門	増田新吉	鈴木九平
2	2	1		2			2		1		2	2	2	2	2	2	2
2	2	1		2			2		1		2	2	2	2	2	2	2
2	2	1		2			2		1		2	2	2	2	2	2	2
2	2	1		2			2		1		2	2	2	2	2	2	2
3	3	1		2			3		1		2	2	2				2
3	3	1		2			2	1	1		2	2	2				2
2	3	1		2			2	1	1		2	2	2				2
3	3	1		2			2	1			2	2	2				2
3	3	1		2			2	1			2	2	2				2
3	3	1		2			3	1	1	1	3	2	2				3
3	3	1		2			3	1	1	1	3	2	2				3
3	2	1		2			3	1	1	1	3	2	2				2
3	2	1		2			3	1	1	1	3	2	2				2
3	2	1		2			3	1	1	1	3	2	2				2
3	2	1		2		1	3	1	1	1	3	2	2				2
	2.5	2.5		3			1	3	1	2	2						
	2.5	2.5		3			1	3	1	2	2						
	2.5	2.5		3		1	1	2	1	2	2						
	2.5	1.5	1	2	1		1	2	1	1	2	2					
	2.5	1.5	1	2	1		1	2	1	1	2	2					
	2.5	1.5	1	2	1		1	2	1	1	2	2					
	2.5	1.5		2	1			2	1	1	2	2					
	2.5	1.5		2	1			2	1	1	2	2					
	2.5	1.5		2	1			2	1	1	2	2					

第7表 東 洋 丸 船 中 船 方

氏 名 年 度	北原 徳右衛門・金右衛門					北原 金太郎	北原 次郎兵衛・吉平			北原 吉蔵・鉄太郎	為吉	北原 吉太郎	新吉・桐太郎	直吉
	倉吉	銀太郎	喜代一	梅吉・金太郎	音吉・平太郎		次郎吉	安吉						
明治34	2			1	1	2			1			2		
38	2			1	1	2			1			2		
39	2			1	1	2			1			2		
40	2			1	1	2			1			2		
41	2	1		1	1	2			1		1	2		
42	2	1		1	1	2			1		1	2		
43	2	1		1	1	2			1		1	2		
44	2	1		1	1	2			1		2	2		
大正 1	2	1		1	1	2			1		2	2		
	3	1		1	1	2			1		3	2		
	2	3	1	1	1	2			1		3	2		
	3	3	1	1	1	2			1		4	2		
	4	3	1	1	2	2			1		4	2		
	5	3	1	1	2	2			1		4	2		
6	3	1		1	2	2			1		3	2	1	
昭和 1	3	2	1	2	2	1	2.5	0.5	1	1	3	3	1.5	
2	3	2	1	2	2	1	2.5	0.5	1	1	3	3	1.5	
3	3	2	1	2	2	1	2.5	0.5		1	3	3	1.5	
7	3	2	1	2	2	2	0.5	0.5			3	3	1.5	
8	3	2	1	2	2	2	0.5	0.5			3	3	1.5	
11	2	2	1	1	2	1.5	2	0.5	0.5		3	1	1.5	
14	2	2	1	1	1.5	2		0.5			3	1	1.5	
15	2	2	1	1	1.5	2		0.5			3	1	1.5	
16	2	2	1	1	1.5	2		0.5			3	1	1.5	
17	2	2	1	1	1.5	2		0.5			3	1	1.5	
18	2	2	1	1	1.5	2		0.5			3	1	1.5	

「松魚船人名帳」「松魚船益勘定」「鯉船船徳帳」(北原吉右衛門氏蔵)より作成。

山崎利吉・力藏	長谷川音吉	山下静一	亀沢勇次・勘吉	鈴木銀太郎	船方中	川口庄平	中野兼吉	中野市郎兵衛	鈴木仙太郎	近藤伊右衛門	町田權三郎・權吉	酒井太助	徳田清吉	下村亮	小梁泰治	岩本留吉
1	1	1	1													
1	1	1	1													
1	1	1	1													
1	1	1	1	1	1											
1	1	1	1	1		1										
1	1	1	1	1		1	1	1	1	1						
				1												
1		1	0.5			1	1		1	1	1.5	0.5	1	0.5	0.5	
1		1	0.5			1	1		1	1	1.5	0.5	1	0.5	0.5	
1		1	0.5			1	1		1	1	1.5	0.5	1	0.5	0.5	
1		1	0.5			1	1		1	1	1.5	0.5				
1		1	0.5			1	1		1	1	1.5	0.5				0.5
1		1	0.5			1	1		1	1	1.5	0.5				0.5
		1				1			1	1	1.5	0.5				0.5
		1				1			1	1	1.5	0.5				0.5
		1				1			1	1	1.5	0.5				0.5
		1				1			1	1	1.5	0.5				0.5

第7表 つづき

氏名 年度	北原市蔵・清三		鈴木熊吉・権吉		鈴木仙右衛門・福太郎		原田仙吉・与七		片山幸松・市平・市太郎		鈴木清右衛門・寅吉		鈴木弥七		北原銀蔵		北原友吉		増田音吉	
明治34		1	1	1	1	1	1	1	1	1										
38	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1										
39	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1										
40	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1										
41	1	1	1	1	1	1	1	1	1				1							
42	1	1	1	1	1	1	1	1	1				1							
43	1	1	1	1	1	1	1	1	1				1							
44	1	1	1	1	1	1	1	1	1				1							
大正1	1	1	1	1	1	1	1	1	1											
	1	1	1	1	1	1	1	1	1						1	1	1	1		
	2	1	1	1	1	1	1	1	1						1	1	1	1		
	3	1	1	1	1	1	1	1	1						1	1	1			
	4	1	1	1	1	1	1	1	1						1	1	1			
	5	1	1	1	1	1	1	1	1						1	1	1			
	6	1	1	1	1	1	1	1	1						1	1	1			
昭和1	1	1.5	1.5				1.5		1.5			2	1				1			
2	1	1.5	1.5				1.5					2	1				1			
3	1	1.5	1.5				1.5					2	1				1			
7	1	1.5	1.5				1.5					2	1				1			
8	1	1.5	1.5				1.5					2	1				1			
11	1	1.5	1.5				1.5					2	1				1			
14	1	1.5	1.5				1.5					2	1				1			
15	1	1.5	1.5				1.5					2	1				1			
16	1	1.5	1.5				1.5					2	1				1			
17	1	1.5	1.5				1.5					2	1				1			
18	1	1.5	1.5				1.5					2	1				1			

のである。配当比率は、子供代の合計が沖乗漁夫手当の二人五分相当で、それを一四才二分、一三才一分五厘、一二才一分、一一才五厘を配当し、さらに一〇才以下は合計で沖乗り一人の七分を見込んでゐる。これが昭和五年には、子供代合計が沖乗り漁夫手当の三人五分に増額された。

町新6	清三福5	重十5	熊辰5	仙一5	静幸5
内吉5	直正4	喜平政4	汐兼4	勘忠4	川作貫4
寅勝3	熊吉3	庄慶3	為福3	内次郎3	川平信3
安義3	喜平榮2	吉吉2	十新子2	徳松2	弥一政2
安德1	直鉄1				
惣小子二十五、四止					
百六十五円二銭				一人前	
四百十二円五十五銭				二人半	
三十三円				二分	
十九円七十五銭				一分五厘	
十六円五十銭				一分	
八円二十五銭				五厘	
四円五十四銭				十才九才	
三円六十三銭				八才七才	
二円七十二銭				六才五才	
一円八十銭				四才三才	
九十一銭				二才一才	

この記録は、昭和二年夏漁七月の利益配当計算の一部で子供代を示し、名前（一部は屋号と略称で記されている）に付された数字は年齢を表わす。また一部に「女」と記されているのは男児のない世帯で、将来の入婿養子を想定して男児と同じ配当を長女に限り与えているも

昭和八年夏海 ⁽⁷⁾	当リ
金百六十四円七十三銭	三人半
金五百七十六円五十五銭	二分
二分金三十二円九十五銭	十四才以上
金二十四円七十一銭	一分五厘
金十六円四十七銭	十三才
金八円二十四銭	一分
金五円	十二才
金四円	五厘
	十一才
	子供一人
	十才九才
	八分
	八才七才

金三円

六分
六才五才

金二円

四分
四才三才

金一円

二分
二才一才

さらに昭和一四年には、一〇才以下を従来の子供代合計の七分から、一五〇一才の比率をそのまま延長した段階的通減制をとるように改められた。

昭和十五年夏海⁽⁸⁾

金千百六十三円七十八銭

三人半

金五百八十円四十銭

二分
十四才以上

金百三十円五十九銭

一分五厘
十三才十二才十一才

金百七十二円十二銭

一分
十才九才

金百八十五円二十八銭

八厘
八才七才

金五十二円二十三銭

六厘
六才五才

金二十三円二十二銭

四厘
四才三才

金十七円四十二銭

三厘
二才一才

かかる子供代の存在は、かつて漁船を船中が共有した時代の育英的「美風」⁽⁹⁾の意味も否定しがたいが、一種前貸的な乗船者確保の手段であったと考えている船元層もいる。鯉漁業では、漁船の運航過程のみが機械化されたにすぎず、一本釣労働部分はいぜんとして手労働に依存している。したがって船元が、熟練した乗組員の協労組織を経営利益上船中に求めたがために、子供代が長く存続したとみることもあながち見当はずれではなからう。鯉漁業がもつ独特の労働組織の重要さは、独自の船中労働組織を組めずに東海丸船中との寄合世帯となつたときの高砂丸の経営が、不振のうちに終つたことでも知れよう。

注

(1) 岡本清造「焼津鯉漁業経営形態の推移(二)」水産界 六〇七号 昭和八年 一八〇二三頁。

(2) 「漁方規定取極之事」近藤久一郎氏蔵。

(3) 「漁業約定証」北原吉右衛門氏蔵。

(4) 北原吉右衛門氏からの聞きとりを主にした。なお氏は記憶違いも皆無

ではない旨の注釈をつけられており、また筆者の聞き違いも考えられる。今後機会あるたびに補正を加え完成を期したい。

- (5) 東海遠洋漁業株式会社『同社三十年史』昭和十二年 一五～二二頁。
- (6) 「子供帳」北原吉右衛門氏蔵。
- (7) 前掲書(6)。
- (8) 前掲書(6)。
- (9) 前掲書(5) 一五頁。

四 総括

本稿の課題は、頭書に掲げたとおり焼津の鰹漁業における資本形成の問題を、東洋丸船元北原家の経営と同船中関係の事例から検討することにあつた。その結果得られたことは、動力船建造を東海遠洋漁業株式会社との共同出資によって実現させたことは、上からの働きの存在をまず大前提として認めねばならないことである。しかし船中内部からの自己蓄積の動向もまたみられなかったわけではない。動力船建設初期の船中出資分は、船元ばかりでなく船中船方の零細な資金も糾合されている。そして五年後には早くも第二の新船建造にこぎつけ、以後旧新船それぞれ一〇年ごとの代船建造のたびに大型化がなされていった。だが順調にみえたこの道程も昭和恐慌によって頓座し、船中側からの経営自立は遅れることになった。とはいっても、これですべてがもとの状態に還元されてしまったわけではない。船中内での船元層の着実な成長は、戦後の船主法人からの経営自立を用意することになった。

また鰹漁業における資本形成の遅れは、昭和恐慌の外的条件ばかりともいえない。鰹漁業が北洋漁業⁽¹⁾や以西底引網漁業⁽²⁾に比べて資本形成が遅かったのは何故か。鰹漁業で機械化されたのは動力船による運航過程のみで、一本釣漁法からくる手労働部分を多く残した。この部分的機械化と手労働の残存による相対的低生産性は、船主法人からの経営自立を遅らせ、また外部からの投資誘因を小さいものにした。この中であつて蓄積を可能にした条件としては、経営と労働の未分化に基ずく利益分配上の大仲歩合制と、船中労働組織が考えられる。この大仲歩合制が経営上もつ意味を全経費計算の中で位置づけること、および船中労働力の再生産過程を夏漁・冬漁の周年労働体系と家計経済の中でとらえることが残された課題である。

注

- (1) 三島康雄『北洋漁業の経営史的研究』昭和四五年 ミネルバ書房。
- (2) 吉木武一『以西底曳漁業経営史論』昭和五五年 九州大学出版会。

(本学助教・地理学)